

地域の子どもへの伝統芸能の伝承や普及 (2) — 島原子ども狂言における受講者の意識調査報告 —

Participants' Attitude Survey Report of Kyogen Class for children
in Shimabara

山 本 百合子

Yuriko YAMAMOTO

音楽教育研究ユニット

(令和4年9月30日受付, 令和4年12月20日受理)

抄 録

昨年度の本紀要掲載拙著論文(注)において, その取り組みの概要や経緯を調査報告した, 長崎県島原市教育委員会が主催する「肥前島原子ども狂言」をめぐる, 受講者側の意識を探るべく, 2021年度末である2022年3月に, 受講者とその保護者を対象とするアンケート調査を実施した。本稿は, そのアンケート調査の内容と, 調査結果の報告及び分析である。前稿において論じたこの事業の意図や意義, そして関係者達の抱いている思いや取り組みの姿勢に対して, 受講する子どもたちやその保護者達はどのような意識を持っているのか。アンケート調査結果から把握できる受講者側の意識の実態と, そこから考えられるこの取り組みの今後に期待される成果や展開についても述べる。

はじめに

長崎県島原市教育委員会が, 市の公共施設である島原文化会館を拠点に, 地域の文化育成事業として平成16(2004)年に立ち上げた「島原子ども狂言ワークショップ」は, 「肥前島原子ども狂言」への改称を経ながら継続し, 来年度(2023年度)には20周年を迎える。事業が始まって間も無い頃に幼児や小学校低学年児だった受講生には, 受講年限である高校3年生まで10年近くも受講を継続して卒業し, 一旦は大学進学等で地元の島原市を離れながらも, 大学卒業後に地元に戻って就職するなどして, この事業を広報・支援するような場面に従事する人材も出てきている。また当初から, そして現在もなお, 受講者の中には兄弟姉妹で揃って受講する子どもも多く, 一度受講すると長く受講を続ける子どもが多いのもこの事業の特徴である。こうした受講実態の背景には, 受講者側のどのような意識があるのか。これまで殆ど調査がされていなかったこの事業の受講者側の意識を探るアンケート調査を, 2022年3月に実施した。

アンケート調査対象の事業の内容と実績

アンケート調査の内容の説明に先立ち, まずアンケート調査の対象となった2021年度受講生の1年間の活動内容について紹介しておく, 以下の通りである。

4月: 受講者募集期間(約1ヶ月間)

5月中旬: 年度初め開講式・第1回講習

6月～10月初旬: 平均して月2回計9～10回の講習開講

(和泉流野村万禄師による狂言実技講習が大半だが, 受講生のための自主稽古の回や, 狂言実技以外の内容の保護者も対象とする講習や座学の回も含む構成。)

10月上旬: 「島原薪能」舞台出演(前日申し合わせ(=通し稽古)を含む)

11月～2月：月1～2回程度の子どもの自主稽古

3月：1年の総括としての講師指導の稽古と「春の狂言会」舞台出演・閉講式

2021年度の場合も、それまでと同様、5～10月の約10回の講座の過半を占めるのが玄人の狂言方である和泉流野村万禄師による実技講習である。うち3回は当初から講師を招かない、受講生とボランティアスタッフによる自主稽古として予定されていて、その他に親子で着物や袴の着付け方を習う「着付け講習会」が1回、また地域史研究家の松尾卓次氏を講師に迎え、市立図書館収蔵の島原藩の古文書の集積である「松平文庫」中の能狂言関係資料を閲覧しながら島原の歴史と芸能の関わり等についての講話を親子で聞く座学の1回も7月に計画されていた。

ところが実際には、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、5月に予定されていた開講式及び実技講習初回は、受講者の子ども達と保護者が集まって県外から訪れる玄人の講師を迎えることが難しくなって延期され、2回目の講習が予定されていた6月9日には、教育委員会職員が文化会館にコンピュータやカメラや大型モニターを持ち込んで、オンラインで講師の野村万禄師と繋ぎ、なんとか開講式と狂言実技講習を実施しようとしたが、音声や映像のスムーズな伝達が困難で、狂言の実技講習をオンラインのリアルタイムで実施するのは不可能との判断に至る。主催者は、同6月下旬には感染予防対策を念入りに施して、子どもたちが一度に多数集まらない個別あるいは2～3人ずつの対面実技講習を1回実施にこぎつけるが、その後も夏にかけて、感染症の感染拡大は進む一方で、対面での実技講習の中止が続いた。それでも主催者は10月上旬の島原城新能の実施と子ども狂言の出演を諦めず、講師の野村万禄師に、子どもたち1人1人の教習曲の演技や謡の手本録音や手本録画の作成を依頼し、7～9月中旬まで予定されていた何回かの実技講習は、録音録画教材を用いた受講者各自による自主稽古を保護者の協力下で行ってもらうことになる。保護者達が楽しみにしていたという親子での着付け教室の回も、2021年度は実施できずに終わった。一方で7月に予定されていた市立図書館での松尾氏の座学講座については、子どもたちが声を出して動き触れ合うような内容でないことや、参加人数も限定的という条件から実施が叶い、その講座の視察に出向いた筆者は、講師による実技指導を思うように受けられていない受講生の子どもたちや保護者でも、地域の歴史や芸能に関する資料などへの興味関心や勉強意欲が高いことを目の当たりにした。10月9日開催の島原城新能公演への出演を目前にした9月下旬になって、やっと対面での講師の指導を受けられることになった受講者の子どもたちであったが、この年度から初めて受講する子どもの数は全体の2～3割程度であることから、久々の対面指導にも臆することなく、玄人の講師の圧倒的な声の響きや洗練された演技（身振り）に直接触れる稽古に、むしろ大きな喜びと若干の緊張を抱きつつ、舞台上観客に見られる演技をするための心構えや厳しさを肌身で確認して、無事に新能公演への出演を果たした。

このワークショップの年間計画では、上半期を終えた10月上旬という時期のこの新能公演出演が、各受講生にとって、与えられた教材曲の表現技能を玄人の講師の指導で一定レベルまで仕上げる活動の区切りとなっていて、その後の下半期は、幅広い年齢と経験値の子どもたちが、ある程度習得している自分の教材曲を持ち寄りながら自主稽古を続けることで、子どもたち同士の教え合いや学び合いの場が発生すると同時



2021年度開講時の受講者募集チラシ表↑裏↓



に、保護者とは異なる地域の大人達であるボランティアスタッフとの交流を深める機会としても活かされている。実際、講師の万禄師の評価や指導がない状態での稽古は、表現技能面の習得や維持には限界が否めず、2月下旬から3月に再び講師の万禄師が対面稽古をする際には、講師に言わせると「だいぶ学び直しが必要」な状態になるが、受講生全体としては、子ども同士やボランティアスタッフとの人間関係がかなり育まれ、ひとつの舞台上演に向かう上での結束力は上がっているという。

年度末に「春の狂言会」と称する舞台公演に再度挑戦し、家族や地域の人々に1年間の稽古の成果を見てもらうことで、受講生は、狂言の表現技能面の達成感とこの活動を通じて得た新たな人間関係の広がりを実感し、1年間の受講の満足感に至っているのではないかと想像される。

アンケート調査の概要

アンケート調査は、事業を主催する島原市教育委員会の担当者との相談のもと、筆者（山本）が紙面のアンケート様式を考案作成した（【資料1】）。回答を求める受講者が幼児から中高生までの年齢の幅があって自力で回答できる子どもと回答に親の手助けが必要な子どももいることや、受講する子ども達自身への質問と保護者への質問の双方があることから、両者をひとつのアンケート用紙内に収めることで、確実かつ丁寧な回答を引き出す意図で、様式は紙面1枚の表裏に収め、2022年3月20日に開催された「春の狂言会」の舞台上演発表後の年度末閉講式において、受講者全員に配布し、教育委員会担当者への手渡しによる提出（回収）を行ってもらった。

島原子ども狂言 保護者アンケート	
2022年3月	
◎ 大変お手数ですが、複数のお子様に参加されている場合は、 お子様お1人毎に1枚 のこの回答を願います。	
● 島原子ども狂言に参加されているお子様の学年（2022年3月現在）	
年少 ・ 年中 ・ 年長 小1 ・ 小2 ・ 小3 ・ 小4 ・ 小5 ・ 小6 中1 ・ 中2 ・ 中3 ・ 高1 ・ 高2 ・ 高3	
● 島原子ども狂言に初めて参加してから、今年度は何年目でしたか？ () 年目	
● 兄弟姉妹も参加されている場合、他のお子様の学年は？ ()	
● 島原子ども狂言に参加しよう(参加を継続しよう)と思われた きっかけ(理由) を、3つまで教えて下さい。(回答は1つでも可、複数あれば色々教えて下さい。)	
きっかけ(理由)①	
きっかけ(理由)②	
きっかけ(理由)③	
● 島原子ども狂言を通じてお子様が学ばれたのは、どんなことだと感じますか？3つまで教えて下さい。(回答は1つでも可、複数あれば色々教えて下さい。)	
学んだこと①	
学んだこと②	
学んだこと③	
● 今年1年間の活動内容のうち、保護者の印象に残っているのは、どんな活動ですか？(複数選択可)	
万禄先生によるお稽古 ・ 参加者同士の交流 ・ ご家庭での自習 図書館での松尾先生による講座 ・ 秋の新能公演出演 ・ 春のおさらい会 その他 ()	
● 今年1年間の活動内容のうち、お子様ご本人達にとって楽しかったのは、どんな活動でしょうか？(複数選択可)	
万禄先生によるお稽古 ・ 参加者同士の交流 ・ ご家庭での自習 図書館での松尾先生による講座 ・ 秋の新能公演出演 ・ 春のおさらい会 その他 ()	
● 島原子ども狂言にお子様に参加する上で、保護者にとって大変だったことがあれば、それはどのようなことだったでしょうか？	
● 島原子ども狂言の価値や有難さは、どんな点にあると感じられますか？	
● 親御さんは、何か伝統芸能のお稽古をした経験はありますか？	
ある → 何を？ () ない	
● 今後、能狂言のプロの舞台上演をもっと観たい と思いますか？	
思う ・ 特に思わない	
● 来年度も、お子様を島原子ども狂言に参加させたい と思いますか？	
思う ・ 特に思わない	
質問は以上です。ご協力をありがとうございました。	

【資料1】2021年度末（2022年3月）に実施したアンケート紙面

回答は、本音を引き出すためにも無記名にはしたものの、受講者の年齢や経験年数によって意識の違いが現れることも予想されたので、受講者の年齢や経験年数を明記させ、兄弟姉妹児すなわち同じ保護者の世帯から参加している子どもについても、それぞれの子どもについて回答を依頼した。2021年度の実受講者全31名のうち20名分の回答を得られ（回収率65%）、データの数としては少ないものの、幼稚園児から高校生までの各年齢層の回答を含む、当該年度の受講者の6割強の声を拾えたことにはなる。以下に20件の回答内容を一覧表に集約整理した。

アンケート回答内容 一覧

学年		高3	高2	中3	小3	小5	小5	年少	小2	中3	年長	年少	小2	中1	小1	小4	小5	小2	年中	小2	小4	回 答 数
何年目		8	8	8	5	7	1	1	3	7	3	1	4	8	4	6	3	3	2	2	3	
参加 兄弟姉妹		中3 高2	中3 高3	高2 高3	小5姉	小3	—	小2	年少	—	(兄?)	小2 年長	—	小1 小4	中1 小4	小1 中1	年中 小2	年中 小5	小2 小5	小4	小2	回 答 数
参加の きつかけ	ボランティアスタッフの誘い				1	1																2
	兄弟姉妹がやっていたから	1	1	1	1						1	1							1			7
	チラシ(幼稚園で配布)を見て	1	1	1				1	1	1			1									7
	狂言への興味関心						1	1	1								1	1	1			6
	立居振舞・礼儀作法を学ばせたいと思った								1													1
	家族・親族の勧め													1	1	1	1	1				5
	友人に誘われて									1												1
参加して学んだこと	立居振舞・正しい姿勢や座り方 じっとしていること				1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1		1				12
	礼儀作法(挨拶)						1															1
	大勢の協力でひとつの舞台上演をより上げる				1	1				1							1		1			5
	舞台度胸・舞台出演経験				1			1		1				1	1	1	1	1				8
	和泉流狂言の舞や謡	1												1	1	1		1	1	1	1	8
	島原の歴史や文化		1				1			1												3
	日本文化とその素晴らしさ		1																			1
	今昔の人間の普遍性		1																			1
	稽古することで何ができるようになる自信			1																		1
	ボランティアスタッフの温かさ・有難さ						1										1		1			3
	感謝の気持ち					1																1
	異年齢児とのコミュニケーション力							1											1	1	1	4
保護者の印象に残った活動	万禄先生の稽古	1	1	1	1	1	1		1	1				1	1	1	1		1			13
	参加者同士の交流																1					1
	家庭での自習							1									1	1				3
	図書館での松尾先生の講座						1												1			2
	秋の薪能公演出演	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1			1			15
	春のおさらい会	1												1	1	1			1			5
	その他																					0
参加児にとって楽しかったこと	万禄先生の稽古						1	1	1					1	1	1			1	1	1	9
	参加者同士の交流	1			1	1	1		1		1		1				1	1		1	1	11
	家庭での自習											1										1
	図書館での松尾先生の講座						1												1	1		3
	秋の薪能公演出演		1	1			1			1				1	1	1			1	1	1	10
	春のおさらい会				1	1								1	1	1						5
	その他																					0
保護者が大変だったこと	時間調整				1	1							1									3
	夜に稽古があることへの対応							1	1					1								3
	送迎																1	1	1	1	1	5
	家庭での稽古				1	1																2
	コロナ対策	1																				1
	部活動との両立(調整)		1																			1
	受験勉強との両立					1																1
	やる気のない時のケア			1															1			2
この活動の価値や有難さ	狂言の表現技法の難しさ						1															1
	スタッフや参加児の名前がわからないこと									1	1											2
	他校の子供との交流				1	1											1	1				4
	薪能の舞台に立つ経験ができること				1								1									2
	島原の歴史や文化を学べた	1					1										1	1				4
	スタッフ(市職員やボランティア)や保護者 達に世話になったこと		1				1					1					1	1				5
	幅広い年齢児との交流					1											1	1				3
	子どもや初心者から狂言を習えたこと					1	1	1	1	1		1		1								6
	日本文化を学べる／伝承に関われる							1									1	1		1	1	5
	和装の経験や着付を習えた						1	1						1								3
	島原独自の事業や内容であること							1		1									1			3
	保護者の伝統芸能の経験	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	今後もっとプロの舞台を観たいか	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	20
	次年度も子供を参加させたいか?	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	17
世帯																						
		1				2				3				4				5				
		6				7				8				9								

回答内容の分析と考察

続いて、集約した回答から読み取れる受講者側（本人及び保護者）の意識について、以下に分析と考察を述べる。

（1）参加のきっかけ

このワークショップに参加することにしたきっかけを、自由記述で最大3つまで回答できる欄を設けた。その結果、多く書かれたのは、「（配布された）チラシを見て」と「兄弟姉妹が参加していたから」という回答である。市教委はこの事業の案内チラシをホームページと Facebook に掲載して告知宣伝をしているほか、市内の幼稚園・小学校に紙面のチラシを配布している。チラシを見て関心を持ったのがきっかけである受講者が一定数いることが確認でき、ホームページや SNS そして紙面のチラシによる告知宣伝が有効に機能していることが認められる。また、兄弟姉妹が共に受講している世帯の回答には、いずれにおいても兄姉の参加が兄弟姉妹の参加のきっかけであることが書かれていた。講習の開催時間が平日の夕方、経験を積んでいる小学高学年から中高生の受講者の個人指導も含めると 17 時頃から始まって、幼児中心の初心者を含む全体稽古が 19 時頃に行われて、終了は 20 時半になるなど、比較的長時間になることが多い上に、受講生の子どもが家庭でお役いをするためにも、保護者は稽古の現場に付き添って指導を受ける様子を録画したりするため、妹弟がいる場合には同伴させざるをえない事情も容易に想像され、弟妹の多くが姉兄の参加に同伴しているうちに自身も参加したくなったり、保護者の都合で弟妹も一緒に参加させるに至るなどの経緯が窺われる。ボランティアスタッフを含むこの事業の関係者に家族・親族がいたり友人・知人がいたりして参加を勧められたという回答もあった。また狂言という芸能種目自体への関心を挙げている回答も見られた。しかし、この活動の成果を市民に観てもらえる薪能などの「舞台発表を見て」という回答が無かったのは意外だった。

（2）参加して学んだこと

この質問は、保護者から見て、受講者の子どもがこのワークショップを通じて学んだと感じることを尋ねてみた。20 名中の 12 名が、自由記述にもかかわらず「（狂言の作法による）立ち居振る舞い」「正しい姿勢」「じっとしていること」などの、狂言を学び演じる上での基盤となる身体のコントロール面について挙げた。これは、講師の万禄師が、受講者の年齢を問わずに稽古をつける際に常に強調していたことでもあり、講師の教えが素直に受け入れられ学ばれていることがわかる。次いで、前半日程終了後の 10 月と年間日程終了後の 3 月に、原則として受講者全員が経験する舞台公演への出演によって得られる「舞台経験や舞台度胸」という点を挙げている例も多かった。「和泉流狂言の演技（舞や謡）」という講習技能そのものを挙げている例もあった。座学などからも学んだ「島原の歴史や文化」という回答も見られた。一方で、講習内容というより、この事業が「場の提供」という趣旨で意図する事業目的の一面、すなわち「市民同士の学びを通じた出会いやコミュニケーションを深める」ことに起因する「大勢の協力でひとつの舞台上演を作り上げること」であるとか「異年齢児とのコミュニケーション」や「ボランティアスタッフの温かさ有難さ（にふれられた）」といった点を挙げる例も複数あった。回答の筆跡や書きぶりから高校生の受講者自身が回答を記入したと思われるものとして、狂言という芸能のテーマでもある「今昔の（時代を超えた）人間の普遍性」という回答も見られ、長年（8 年間）の受講によって狂言の持つ芸能としての主題の特質を理解し、それを言葉にできる力もついた受講者がいることもわかった。

（3）印象に残った／楽しかった活動（保護者／受講者）

1 年間の参加を振り返って印象に残るのはどの活動なのかを、保護者と受講者それぞれに、6 + 1 つの選択肢から複数選択可で回答してもらった。選択肢は、「万禄先生によるお稽古」「参加者同士の交流」「ご家庭での自習」「図書館での松尾先生による講座」「秋の薪能公演出演」「春のおさらい会」そして「その他」である。

保護者の印象に残ったと回答があったのは、「秋の薪能公演出演」が最も多く 20 名中 15 名、次いで「万禄先生によるお稽古」が 13 名だった。玄人の能楽師も出演する薪能公演の舞台に我が子も着物と袴を着けて出演したこと、専門家として遠い存在である玄人の狂言師に直接稽古をつけてもらえる、その稽古の様子を間近で見学できたことは、保護者にとっても、他では体験できない貴重な印象深い経験だったのであろ

う。同時に、受講者の子ども達にとって印象深いのはどれかというところ、最も回答数が多かったのが「参加者同士の交流」であり、この活動を通じて幼稚園や学校では得られない新たな友との人間関係が獲得され、それを大事に思っている子どもが多いことが感じられる。もちろん「万禄先生によるお稽古」も同様に回答が多く、感染症の影響で対面での直接の稽古が思うようにできなかった2021年度の受講生にとっては、講師のつけてくれる稽古の印象は例年以上であったと思われる。

(4) 保護者の負担

幼稚園年少児より受講対象となっていて、和装の装束や道具も身に着けての舞台上演参加を含むこのワークショップへの参加には、保護者のサポートが欠かせない。主催者も保護者の協力をどれだけ引き出し、結果として保護者にも十分な満足を与えようという視点を持つての実施が、常に意識されて丁寧に考えられている。この質問も自由記述での回答欄を1枠設けてみた。しかし、大変だったことが数多く記述されている回答は少なく、回答にも「強いて言えば」などの但し書きがあるように、保護者は然程大変だと感じてはいないようだ。幼稚園児や小学校低学年児の親に「夜に稽古があること」による家庭生活のリズムへの影響を述べる回答や、中高生になると学校での部活動や受験勉強との兼ね合いに触れる回答もあった。実務的な面として、共に受講する子ども同士が、一人一人名札などをつけていないため名前がわかりにくく親しくなるのに時間がかかることや、毎回お世話になって、時には指示やアドバイスを受けてたりもするボランティアスタッフの面々の名前もわかるようにして欲しいという要望も記入してくれた保護者がいた。

(5) この活動の価値や有難さ

この質問も自由記述の回答欄を1枠設けたところ、回答内容は、一見したところ、様々な側面に分散した。現代の子どもの習い事としてあまり一般的ではない「狂言」という古典芸能の技芸を、自力では出会えることの稀な玄人の役者に教えてもらえたという点を挙げた回答が6人、この講習への参加によって日本の伝統的な文化を学びその伝承に関われるという点を挙げた回答が5人、この2つの系統の回答は、合わせて、日本の伝統的な芸事を本物の伝承者から教わり、体験的に文化の継承にも参加できることの価値への評価と見られ、合計11人の回答となるので、大きな評価ポイントだろう。「島原の歴史や文化を学べた」「和装の経験や着付を習えた」という評価も、大きな意味では同系統の評価と考えられる。それと同時に「他校の子どもとの出会いや交流」「幅広い年齢児との交流」「スタッフや保護者達に世話になった（家族以外の人との出会いや交流）」という点も挙がっていて、現代の子どもとその保護者には、幅広い出会いや人との交流の機会を求める気持ちもあり、そのような場としてのこの活動の価値も評価していることがわかる。印象に残った活動で多く挙がっていた舞台への出演については、この質問においては回答数は少なく、活動の一面として印象的ではあっても、事業の価値としては1年間を通した活動の継続で得られることの価値の方を冷静に受け止め評価していることもわかった。

(6) 保護者の経験

子ども達の受講に何らかの影響があるのではないかと予想していた保護者の経験については、今回の調査で回答を得た10世帯の保護者については、伝統芸能の経験がある保護者がいなかった。ただ、筆者自身が取材中の保護者との雑談の中で情報を得た例として、雅楽の教習経験があり、日本の伝統音楽の教習を受けることに強い意欲を持ち、雅楽と能楽（狂言を含む）の違いや共通点に高い関心を抱いている保護者がいたことも、稀な例であったかもしれないが、ここに挙げておきたい。

(7) 狂言文化への関心と講習継続の意欲

子どもを対象にした伝統芸能の教習活動の効果として、伝統芸能の上演に対する興味関心や鑑賞意欲・教習意欲も向上することを、筆者は期待する立場にあるが、今回のアンケートの最後に尋ねた「今後もっとプロの舞台を観たいか」「次年度も子どもを参加させたいか」の2点については、一部「本人（子ども）が望めば」と子どもの意思を尊重する但し書きが認められたもの、回答を寄せた全員が肯定的な回答だった。

まとめ

このたびの、アンケート方式による受講者側の意識調査からは、「肥前島原子ども狂言」の受講者や保護

者の多くに、この事業において主催者の意図する「地域にゆかりのある伝統芸能を子ども達に学ばせることで、地域住民の地域理解そして自国の伝統文化理解を促してその継承に繋げるとともに、地域住民同士のコミュニケーションや親睦を活性化して豊かな次世代社会へと繋げよう」という趣旨や目的が伝わって理解されており、受講者側の事業への評価や満足感にもなっているということがわかった。

そして、この事業の趣旨や目的への受講者の共感と、その結果としての、受講生の6～7割を占める継続受講者の存在、なかには10年近くも継続してこの活動からの卒業を残念がる姿も見られたり、卒業後に再び地元でこの事業の支援に携わる卒業生が現れ始めているという現状には、筆者が前著(注)で指摘した、この事業における独自の教習システムと、そのようなシステムを考案し運営のためのボランティアスタッフを選任起用している、地元に通じたプロデューサーの力や、集められたスタッフの熱意に支えられたきめ細かい受講者と保護者への指導と情報伝達、子ども達に次代の地域社会を託すために温かい眼差しで子どもに接する各方面の人々の姿の全てが実に有効に連携していることが見え、その成果から、教習地域の子どもへの地域ゆかりの伝統芸能の教習や伝承が持つ大きな意味も改めて考えさせられる。

狂言を含む日本の伝統的な技芸の学びには、一度や二度の体験や1年間習ってみた程度の経験では掴み取れない表現技術やその味わい、表現手法や様式に含まれる文化としての脈略・背景・意味などの深い学習要素が内在する。それらは、技能や知識の吸収力が高い幼少時に身体で覚えるものの意味が、心身の成長と共に理解を深められて、ある程度の年月の経験と成長の上に存在価値や影響力を増すという性質を持つものでもある。多くの人との関わりを通じて、教習経験や生活経験を蓄えた時に初めて見える芸能の意味や価値が多にある。人間社会の豊かさとは、このような一定の時間をかけた営みの上に実現されるものが少なくないことも、芸能は教えてくれる。

「肥前島原子ども狂言」の取り組みにおいては、来年度の20周年に向けて、卒業生たちの多角的な再参加の場が検討されており、地域の子どもへの伝統芸能の伝承や普及の活動が地域社会にもたらす成果が、今後ますます具体的に見えてくることになるだろう。筆者は今後もその観察調査を続けながら、伝統芸能の価値や意義についてさらなる検証と発信をしていく所存である。

(注) 拙著「地域の子どもへの伝統芸能の伝承や普及 島原子ども狂言にみる教習内容・方法と成果」『福岡教育大学紀要』第71号、2021年3月発行、31～38p.

[参考資料]

島原市教育委員会社会教育課 自主文化事業 島原子ども狂言ワークショップ参加者募集 HP (2022年9月30日最終閲覧)
<URL> https://www.city.shimabara.lg.jp/page1634.html?type=search&q=子ども狂言&radiobutton=4&now_P=1&show_num=20&sc_id=2-

島原城薪能 Facebook (2022年9月30日最終閲覧)
<URL> <https://www.facebook.com/takiginou>

